



7月10日、今津町市ヶ崎湖岸で、朽木中学校のびわ湖遠泳が行われ、3年生26人が、2,000m・1,000m・500mの3つのコースに分かれて挑みました。「エ〜ンヤコ〜ラ〜」と元気な掛け声で、仲間を励まし合い支え合いながら、また、保護者や漁業組合、側泳ボランティアに支えられながら、自分で定めた目標の距離を全員が泳ぎ切りました。

●特集 ②-④ 安心・安全でおいしい学校給食

- 5-7 タウントピックス
- 8 藤樹先生生誕400年祭関連事業
- 9 健康生活
- 10-11 お知らせ拡大版
- 12 みんなで5・7・5
- 13 市長日記・省エネ長者作戦
- 14-15 まちなタ写真館
- 16 国保年金あらかると
- 17 びょういんだより
- 18 教育委員会 information
- 19 そうだ図書館に行こう!
- 20-26 情報おしらせ版
- 27 窓口・納税
- 28 歴史散歩

歴史散歩

No.44

関ヶ原の戦い 朽木元綱の決断

長浜市「朽木街道」



合戦時の本陣に掲げた朽木家馬印

豊臣秀吉の死後、徳川家康は五大老の筆頭として政権を左右する位置につきました。一方、五奉行の一人である石田三成らとの対立を深めていきました。両者の溝は次第に深くなり、ついに戦になりました。慶長5年(1600年)9月15日午前8時、家康率いる東軍9万人と三成率いる西軍8万人が、美濃(岐阜県)の関ヶ原で、秀吉没後の主導権をかけて衝突しました。午前中、東西両軍は互角の戦いを展開していましたが、正午過ぎになって西軍の小早川秀秋および他の4大名2万人の軍勢が東軍に寝返ったことで、西軍は敗れました。

この戦いには、朽木家16代目当主の元綱に率いられた朽木の軍勢600人も参加していました。はじめ、元綱は三成に味方した大谷吉継に従って北陸道を加賀(石川県)へ向けて進軍し、一度、敦賀へ戻ってから湖北の木之本・長浜を経由した後、9月2日に関ヶ原に到着したとされます。しかし、安曇川町船木には、関ヶ原へ向かう朽木の軍勢を舟で長浜

港まで送ったという言い伝えがあり、長浜から米原市野一色に通じる街道は、「関ヶ原合戦」に向かう朽木の軍勢が通ったことから「朽木街道」と名づけられたと言われています。おそらく本隊とは別行動の部隊があったものと思われます。

さて、この戦いの勝敗の鍵は、関ヶ原の南西にある松尾山に陣取った小早川秀秋隊1万5,600人が握っていました。秀秋の東軍への寝返りを心配した大谷吉継は、小早川隊を監視するために朽木元綱・脇坂安治・小川祐忠・赤座直保の軍勢4,200人を松尾山の麓に配置していました。正午ごろになって、家康から寝返りの催促を受けた秀秋は、松尾山を下ると麓にいた朽木・脇坂・小川・赤座らの軍勢とともに大谷隊を攻撃しました。大谷隊が崩れ出したのをきっかけに、宇喜多秀家・小西行長らの西軍主力部隊が敗れ、三成の本隊も敗走し、午後2時ごろには東軍の

勝利が決定しました。その日の夜、細川忠興を頼って家康に面会した元綱は、本領9,595石を安堵されると、17日には三成の居城である佐和山城の攻撃にも参加しました。

ところで、元綱の寝返りについては、藤堂高虎を通じて早くから約束されていたことであるという説と、戦いのなかばで初めて家康に書を送って約束したために、2万石から減封されたという説があります。

「関ヶ原の戦い」直前の元綱の所領を2万石とする書物がありますが、元綱は文禄4年(1595年)に秀吉からも高島郡9,203石2斗を安堵されており、その内訳は戦いの後に家康から安堵された地所とほぼ同じになっています。したがって、元綱の寝返りは前説が正しく、朽木家の系譜がいうように「旧領はそのまま下し置かれた」というのが事実と思われる。

▼今年、オリンピックイヤー。8月8日からは、17日間の熱い戦いが北京で繰り広げられます。第1回のアテネ大会で8競技43種目だった競技数は、今大会では28競技302種目に。今月の表紙は、朽木中学校びわ湖遠泳の様子をご紹介します。オリンピックの競技も多彩ですね。▼子どもの頃は、あんなに待ち遠しかった夏休みも、親となった今は2学期の始業式を指折り数えます。夏休みで、子どもたちの活動の場は学校から地域へ。大人たちの気持ちとは裏腹に、暑さにもめげず毎日飛び回っています。子どもたちの夏休みもこれからが本番。子どもたちが安全で、安心して地域で過ごせるよう、地域の皆さんの見守りをお願いします。



菜園には、太陽の恵み、たわわ。

編集後記